

# 人はなぜ酒を飲むのか

——飲酒動機尺度作成の試み——<sup>1)</sup>

今田 純雄<sup>2)</sup>・鈴木 千尋<sup>3)</sup>

(受付 1999年10月12日)

## Abstract

People differ widely in their reasons for drinking. This article reports on the development of a six-factor measure that assesses four enhancement and two suppression motives for alcohol drinking in adult male drinkers. Apart from the three traditionally accepted motives—social, coping and enhancement—sensory/cognitive pleasures were evaluated as further motives for the use of alcohol. Also, two distinctly different motives were shown to explain the suppression of the wish to drink. Comparison of undergraduate students with male adults showed different patterns of the motivational bases of alcohol use across two groups. Young people tend to drink for social and enhancement motives, although male adults use alcohol to cope with negative emotion and to gain sensory/cognitive pleasure. Data gained from female students suggests the sex difference as the causative factor in their suppression of drinking, when compared with males. These findings indicate the importance of taking into account these different motives to explain drinking behavior in natural settings.

keywords: Alcohol-Drinking-Patterns, Motivation, Factor-Structure, Statistical-Validity, Adolescence, Adulthood

- 1) 本研究は、キリンビール株式会社営業本部マーケティング部商品開発研究所嗜好リサーチグループとの共同研究（1996-1997）の成果の一部である。
- 2) 〒731-3195 広島市安佐南区大塚東1-1-1 広島修道大学人文学部心理学教室
- 3) 〒104-8288 東京都中央区新川2-10-1 キリンビール株式会社

## 1. 序

国税庁「税務統計速報」によれば、1965年度の酒類の国内生産量は約350万 Klであったが、1994年度には約930万 Klにまで増加している。国民全体の飲酒量は、この30年間で3倍近くに増えたことになる。アルコールの「大量消費者」（一日平均150 ml以上のアルコール飲料の摂取者）も同様に、1965年は約100万人、以降1988年まで徐々に増加し、1991年から1994年にかけては約230万人に達したと推定されている（厚生省, 1997）。

このような飲酒量および飲酒人口の急激な増加がみられながらも、人はなぜ酒を飲むのかという、飲酒行動一般の理解は必ずしも進んでいない。飲酒行動に関する研究の多くは、過度の、慢性的かつ依存的な飲酒者、特にアルコール依存症として入通院中の患者を対象としたものであり、アルコール依存がなぜ、どのように獲得されるか、またそのような依存から脱却するにはどのような方法が適切かという観点から行われてきた（e.g., 山田, 1989, Engstrom, 1984）。通常の社会生活をおくっている飲酒者を対象とした研究は少なく（e.g., Polivy, Schueneman, & Carlson, 1976, Gatchel, Baum, & Krantz, 1989）、日常の場面において、人々がなぜ飲酒するのかについては十分に解明されていない。本研究は、このようなことから、一般的飲酒者を対象に、人々はなぜ酒を飲むのかという問題を、飲酒行動を喚起する動機、すなわち飲酒動機の観点から検討していくものである。

人はさまざまな理由、動機により酒を飲む。Cooper, Russell, Skinner, & Windle (1992) は、飲酒の動機として、社会性動機 (SM: social motives)、対処性動機 (CM: coping motives)、気分高揚性動機 (EM: enhancement motive) という3つの動機を仮定し、それぞれを独立して測定しうる尺度の作成を試みた。ここでいう社会性動機とは、帰属する社会集団に受容され、より親密な集団意識を得たいとする動機、対処性動機とは、不安・鬱といった負の感情状態からの逃避、あるいはその状態を減弱・緩和させたいとする動機、また気分高揚性動機とは、正の快状態を得たい、より高揚した気

分になりたいとする動機である。

日常の飲酒は必ずしもこれら3つの動機だけでは十分に説明できない。例えば、酒の味・匂いによって得られる快に動機づけられた飲酒、酒にかかわる知識・信念に動機づけられた飲酒、また癒渴性動機に基づく飲酒（ビールなどの発泡性低アルコール飲料の摂取など）といったものも考えられる為である。そこで、予備研究として、飲酒習慣をもつ成人男女を対象に、自らの飲酒の理由を自由記述させ、飲酒動機にはどのようなものがあるかを探索し、それらの動機を測定しうる尺度を構成することができるかどうかについて検討する。引き続き研究1, 研究2では、その尺度を成人男子および大学生男女を対象に施行した場合の、飲酒動機の年齢差、性差について検討していく。

## 2. 予備研究：飲酒動機測定尺度の作成

飲酒動機を探索するために、飲酒習慣をもつ57名の成人男女を対象に、「どういう時にお酒が飲みたくなるか」「なぜお酒を飲むと思うか」という質問文を与え、回答を求めた。その結果、37名から217項目にわたる回答を得た。これらは、序で述べた社会性動機、対処性動機、気分高揚性動機を含めた9つの動機を反映しているものと解された（Table 1 参照）。感性的快希求動機とは、アルコール飲料そのものの味・匂い、また飲酒の場所・状況がもたらす感覚—感情（sensory-affective）的快を求める動機である。抑制性動機とは、飲酒そのものを抑制する動機であり、食事性動機とは、食事をよりおいしく、たのしく摂取する為に飲酒するというものである。認知的快希求動機とは、ワインの産地、年代を推理したり、摂取したことがないビールがあると、摂取したことがないという理由だけによって飲酒を希求する動機であり、知識、判断、記憶、推理、好奇心といった過程を経て得られる快（知的満足）を希求する動機といえる。外発性動機とは、外部に存在する感覚刺激（主に視覚刺激）により、飲酒が誘発されるというものである。日常の生活場面においては、ビールなどの試飲サービスがあ

Table 1 仮定される 9 つの飲酒動機と飲酒の型

仮定される動機	仮定される飲酒の型	略号
1 社会性	社会的飲酒	SO: SOCIAL
2 対処性	対処的飲酒	CO: COPING
3 気分高揚希求性	気分高揚希求性飲酒	EN: ENHANCEMENT
4 感性的快希求性	感性的快希求性飲酒	SP: SENSORY PLEASURE
5 抑制性	抑制性飲酒	RE: RESTRAINED
6 食事性	食事性飲酒	ME: MEAL
7 知的快希求性	知的快希求性飲酒	CP: COGNITIVE PLEASURE
8 外発性	外発的飲酒	EX: EXTERNAL
9 癒渴感性	癒渴感性飲酒	TH: THIRST

るとつい手を伸ばしてしまうという行動になって現れる。癒渴感性動機とは、喉の渴きを潤したいという動機である。

217項目を、これら 9 つの動機（飲酒行動）を独立に反映する内容となるように整理し、114項目からなる予備尺度を作成し、男 67 名、女 40 名の計 114 名を対象に 3 件法（「はい」「?」「いいえ」）で回答を求めた。それぞれの平均年齢は 40.6 才（SD 9.4）、36.1 才（SD 6.7）であった。その結果、反応分布に極端な偏りのある項目（「はい」「いいえ」のいずれかに 80% 以上の反応がみられた項目）、また項目文が多義的・難解と判断された項目（「?」に 20% 以上の反応が見られた項目）が多数みられた。そこでそれらを除外し、仮定された 9 つの動機に対応すると思われる項目が少なくとも 6 項目含まれるよう、改めて項目の選定をおこなった。その結果、66 項目からなる飲酒動機測定尺度が構成された。

### 3. 研究1：成人を対象とした飲酒動機の測定

#### 3-1. 目的

成人の男子習慣的飲酒者を対象に、予備研究で得られた66項目版飲酒動機測定尺度を施行し、9つの動機を独立して測定できるかどうかについて検討する。なお、予備研究から、飲酒動機の性差は大きいと予想され、また本研究が試行的段階にあることから、被験者を、男性でアルコール飲料の摂取量が比較的多い者に限定することとした。

方法 被験者 東京都に在住する20歳代、30歳代、40歳代の男性それぞれ32名の計96名を対象とした。被験者はすべて通常の社会生活を営む習慣的飲酒者であった。ここでいう習慣的飲酒者とは、「普段のビール飲用量」が、「週5－7日」にわたり、「コップ1－2杯」以上の者である。これらの被験者は、民間調査会社の所有するデータベースにより、条件に合う被験者を電話でリクルートすることにより求められた。その結果、各年代とも、週5－7日にわたり、ビール大瓶1本から2本に相当する飲酒をおこなう者が半数以上を占めた。

#### 3-2. 質問紙

66項目からなる質問用紙を用いた。半数の被験者は、項目順序が逆配置であるものを用いた。正順・逆順の質問紙間で回答に差異が見られなかったことから、以下の処理においては、逆順と正順をあわせて処理をした。

#### 3-3. 結果および考察

本研究で仮定した飲酒動機は9種であった。そこで、66項目について、因子数を9とし、主因子解をもとめたところ、外発性動機に基づくと仮定された飲酒項目にまとまりがなく、また認知性快希求動機、食事性動機、感性的快希求動機に基づくと仮定された飲酒項目が相互に関連しあいひとまとまりの因子を構成していることがわかった。そこで、外発性動機に基づ

く飲酒と仮定された6項目さらに反応に偏りのあった6項目を除き、因子数を6として、再度、主因子解をもとめた。

Table 2に、直交回転後の因子負荷量を示した。6因子での累積寄与率は45.1%と高いものではないが、それぞれの因子は9つの動機から比較的容易に解釈できるものであった。第1因子は、認知的快希求動機、感性的快希求動機、さらに食事性動機に基づく飲酒と解釈できる。酒そのもののおいしさ、酒をのむことの楽しさ、喜びに特徴づけられる因子である。第2因子は、対処動機に基づく飲酒と解釈できる。第3因子ならびに第5因子は、飲酒抑制(節酒)に動機づけられた行動と解釈できる。なかでも第3因子は、アルコール摂取に直接起因する生理反応すなわち酩酊の回避を目的とし、また第5因子は飲酒による過剰なカロリー摂取、体重増加の回避を目的とするものと解釈できる。第4因子は、社会性動機と癒渴感性動機による飲酒と解釈できる。第6因子は、気分高揚性動機を反映する飲酒と解釈できる。

第1因子ならびに第4因子は、複数の動機を反映するものであった。今後、項目の見直し等により因子的に分離された項目から構成される尺度構成も検討されよう。しかし、仮定された9つの動機が分析的要素的でありすぎて、実際の飲酒動機に対応していないと考えることもできる。ここでは後者の立場をとり、第1因子を「快動機」とみなした。また第4因子は、少なくとも日本の社会場面における飲酒は、ビール飲酒と結びつくことが多く、またビールは癒渴感に効果をもつものであるために、意味的に一つのまとまりのある因子を構成したと解される。主たる項目が社会性動機を反映したものと解釈できることから、第4因子を「社会性動機」とした。

次に、因子分析の結果にもとづき、それぞれの因子が独立した尺度を構成できるかどうかについて検討した。Table 3は、それぞれの因子に比較的高い負荷量をもつ項目(Table 2の太字で表示した項目)によって尺度を構成した場合の、尺度—項目相関ならびにクロンバックの $\alpha$ 値を示したものである。クロンバックの $\alpha$ 値は、第1尺度を除き、すべて0.80以下であり、

Table 2 飲酒動機尺度の因子構造

項 目	因 子						SMC
	快 対 処		抑 制 社 会		抑 制 気 分		
	1	2	3	4	5	6	
1	0.74	0.08	0.05	0.13	0.19	0.04	0.82
2	0.71	0.11	-0.02	0.02	0.12	0.03	0.81
3	0.67	0.22	-0.10	0.02	0.21	0.07	0.81
4	0.67	-0.05	0.03	0.04	0.00	0.18	0.88
5	0.65	0.21	-0.18	-0.03	-0.01	-0.02	0.82
6	0.64	0.14	0.00	-0.11	0.25	-0.05	0.79
7	0.64	-0.22	0.14	0.03	-0.03	0.04	0.83
8	0.61	0.34	-0.25	-0.08	0.08	0.01	0.70
9	0.60	-0.14	0.08	0.11	0.08	0.16	0.81
10	0.59	-0.18	0.16	0.04	-0.10	-0.06	0.84
11	0.59	-0.08	-0.02	0.11	-0.36	-0.02	0.77
12	0.58	-0.07	0.31	0.18	-0.15	-0.06	0.77
13	0.57	0.10	-0.17	0.19	0.00	0.02	0.75
14	0.56	0.09	0.06	0.13	-0.04	0.09	0.64
15	0.56	0.07	0.27	0.06	-0.13	0.05	0.72
16	0.55	-0.06	0.33	0.17	-0.01	0.01	0.85
17	0.51	-0.21	-0.22	-0.08	0.07	0.21	0.69
18	0.48	0.04	0.23	0.02	0.01	0.12	0.73
19	0.41	0.07	0.16	0.22	-0.17	-0.20	0.66
20	0.26	0.66	0.26	0.01	-0.11	0.00	0.82
21	0.24	0.69	0.16	0.17	-0.14	-0.10	0.85
22	-0.08	0.75	-0.09	0.01	0.02	0.10	0.82

1 お酒のおいしい飲み方を知るために、人に聞いたり、本で調べます。  
 2 お酒に関する知識や情報を、すすんで集めます。  
 3 お酒を飲みながら、そのお酒の由来、製法、材料などについて、話しを聞くのが好きです。  
 4 いろいろな種類のお酒について、その味や香りを試してみることが好きです。  
 5 おいしいお酒の名前やおいしい飲み方を、人に教えることがよくあります。  
 6 さまざまなお酒について、それらがどのように製造されるかに興味があります。  
 7 食事のときは、料理との相性を考えて、どのようなお酒を飲むかを決めます。  
 8 酒屋などで、知らないお酒を見つけると、説明をしてもらいます。  
 9 店でいろいろな種類のお酒が並んでいると、どのような味や香りがするのか気になることがあります。  
 10 食事の時は、その食事に合うお酒を用意(注文)します。  
 11 お酒を飲むときは、味や香りの違いにこだわります。  
 12 食事をおいしく味わうために、お酒を飲みます。  
 13 味がよいと評判になっているお酒を、わざわざ買い求めることがあります。  
 14 特定のお店や限定された地域でしか飲めないお酒を飲むために、わざわざ出かけることがあります。  
 15 お酒は、食事をおいしく食べるために、飲むものだと思います。  
 16 その日の食事に合わせて、どのようなお酒を飲むかを考えます。  
 17 色々な種類のお酒が並んでいると、つい目をとめてしまいます。  
 18 ビールを飲むときは、グラスに注いだときの色や透明感に関心がいきまします。  
 19 お酒を飲むときは、おいしく味わうためにグラスを冷やするなど気をつかいます。  
 20 気分を落ち着けたい時に、お酒を飲みます。  
 21 気分を落ちつけるために、お酒を飲むことがあります。  
 22 いやなことを忘れるために、お酒を飲みます。

項 目	因 子						SMC
	快 对 処			抑 制 社 会 (体 重)			
	1	2	3	4	5	6	
23	0.01	0.75	-0.03	0.09	-0.05	0.07	0.83
24	0.11	0.71	0.16	0.09	0.00	0.03	0.81
25	-0.07	0.68	-0.10	-0.08	0.08	0.27	0.78
26	0.02	0.40	0.20	0.36	-0.17	0.18	0.64
27	-0.01	-0.10	0.73	-0.10	0.14	0.02	0.74
28	0.01	0.15	0.69	0.07	0.14	-0.05	0.70
29	0.12	0.05	0.68	-0.05	-0.07	-0.05	0.73
30	0.06	0.11	0.54	-0.03	0.04	0.10	0.60
31	-0.08	0.06	-0.46	0.38	-0.06	0.07	0.69
32	0.24	0.12	0.43	-0.11	0.35	0.12	0.62
33	0.01	-0.01	0.43	-0.25	0.19	-0.12	0.76
34	0.19	-0.51	0.40	-0.04	0.04	-0.09	0.73
35	0.06	0.22	-0.10	0.61	-0.11	0.05	0.84
36	0.01	-0.20	-0.16	0.59	0.13	0.18	0.74
37	0.05	0.02	-0.25	0.56	-0.04	0.30	0.78
38	0.11	-0.13	-0.22	0.56	0.05	0.05	0.79
39	0.10	-0.07	0.07	0.49	0.28	0.06	0.72
40	0.21	0.15	0.01	0.49	-0.17	0.02	0.68
41	0.09	0.17	0.13	0.46	-0.03	-0.16	0.52
42	0.07	0.20	-0.03	0.40	0.26	0.22	0.63
43	0.13	0.16	-0.09	0.31	-0.18	-0.17	0.77
44	0.13	-0.10	0.26	0.16	0.67	-0.11	0.76
45	0.18	0.03	0.04	0.10	0.64	-0.48	0.81
46	0.14	-0.17	0.20	0.04	0.64	-0.08	0.73
47	-0.17	0.15	0.17	-0.13	0.51	-0.05	0.62
48	0.10	0.16	0.25	0.02	-0.46	-0.22	0.58

23 いらいらしたり落ちつかない時はお酒を飲みます。  
 24 緊張をゆるめるために、お酒を飲むことがあります。  
 25 憂うつな時やがっかりしている時に、お酒を飲みたいくなります。  
 26 お酒を飲んだ後は、今日も一日が終ったと充実した気分になります。  
 27 お酒を飲むときは、飲み過ぎないように注意しています。  
 28 お酒を飲む時は、二日酔いにならないように注意しています。  
 29 自分の酔っ払った姿を、人に見せないように注意しています。  
 30 週何回お酒を抜くというように休肝日を決めています。  
 31 仲間達と一緒に飲むときは、つい飲み過ぎてしまいます。  
 32 お酒を飲むときは健康について、つい考えてしまいます。  
 33 顔が赤くなるのが嫌で、お酒を飲む量を控えることがあります。  
 34 うざげらしの酒は飲まないようにしています。  
 35 夏の暑い日に、生ビールを飲むのが好きです。  
 36 おおぜいの人と一緒に飲むのが好きです。  
 37 仕事が一段落した時に、仲間達と「打ち上げ」の酒を飲むのが好きです。  
 38 会社の同僚や友人たちとお酒を飲むのが好きです。  
 39 人間関係をよくするために、人と一緒に飲むことがあります。  
 40 のどの渇いたときに、無性にビールが飲みたいくなります。  
 41 結婚式やパーティーなどでは、率先してお酒をつぎに回ります。  
 42 お酒を飲むと、誰かと話がしたくなります。  
 43 スポーツのあとなど、たっぷりと汗をかいた後のビールは、本当においしいと思います。  
 44 体重の増加が気になって、ビールのかわりにお茶や水を飲むことがあります。  
 45 お酒を飲むときは、体重が増えるのではないかと気になります。  
 46 太らないようにするために、お酒を飲む量を控えています。  
 47 お酒を飲むときは、そのお酒のアルコール度数が気になります。  
 48 瓶か缶かの違いによって、ビールの味は異なると思う。



49	お酒を飲んだあとの酔った感じが好きです。	0.15	0.10	0.08	-0.06	-0.08	0.72
50	気持ちよく酔うためにお酒を飲みます。	0.01	0.29	0.13	0.01	0.04	0.65
51	お酒を飲んだあとの高揚した気分が好きです。	0.14	0.11	-0.14	0.11	-0.02	0.56
52	つきあいでお酒を飲むことが好きです。	0.10	-0.04	0.00	0.32	0.04	0.54
53	お酒を飲んだ後の心地よさが好きです。	0.20	0.06	0.15	0.19	-0.22	0.50
54	お酒を飲むと、誰とでもすぐにくちつけられます。	0.12	0.26	0.12	0.36	-0.01	0.38
固有値		8.28	4.85	3.91	2.65	2.50	2.20
寄与率		15.30	9.00	7.20	4.90	4.60	4.10
累積寄与率			24.3	31.5	36.4	41.0	45.1

Table 3 6 尺度の尺度-項目相関 (r) とクロンバックの  $\alpha$  値

	第1尺度	第2尺度	第3尺度	第4尺度	第5尺度	第6尺度
	快	対処性	抑制(酔)	社会性	抑制(体重)	気分高揚
項目数	19	7	8	12	7	7
尺度総点の平均	34.78	13.10	14.06	30.07	10.74	18.19
尺度総点の標準偏差	10.37	4.59	4.33	2.22	1.99	3.00
平均尺度得点 (1-3)	1.83	1.87	1.76	2.51	1.53	2.60
尺度項目相関の平均値	0.61	0.70	0.60	0.51	0.57	0.61
尺度項目相関の最大値	0.71 (1)	0.78 (21)	0.79 (27)	0.58 (54)	0.66 (44)	0.69 (49)
尺度項目相関の最小値	0.46 (18)	0.53 (26)	0.50 (25)	0.44 (39)	0.47 (48)	0.53 (45)
尺度項目相関の有意性	すべて $p < .0001$	すべて $p < .0001$	すべて $p < .0001$	すべて $p < .0001$	すべて $p < .0001$	すべて $p < .0001$
クロンバックの $\alpha$	90.4	77.8	75.2	72.7	62.6	70.0

\* 「尺度項目相関の最小値」, 同「最大値」の ( ) 内の数字は, それらの値を示した項目の番号である。

必ずしも内的一貫性の高いものでないことを示した。しかし、項目一尺度相関については、すべての尺度において、その尺度を構成する項目得点と尺度総点間との間に高い相関が見られた。これらの結果は、本研究によって得られた6尺度が、改良の余地はあるものの、飲酒行動を測定する尺度として使用可能であることを示している。

尺度間の関連を検討するために、6尺度得点間の相関係数 (r) を求め、それらの関係を Fig. 1 に示した。5%以上の有意性が見られたものを中心に全体をまとめると、「社会性動機」と「気分高揚性動機」の関連がつよく、またそれらは「対処性動機」と正に相関することがみられる。「快動機」は「社会性動機」とのみ有意な正の相関を見た。「抑制(酔)動機」と「抑制(体重)動機」の相関は高く、またその両者は、それぞれ「社会性動機」および「気分高揚性動機」と有意な負の相関をみた。「対処性動機」と「抑制(酔)動機」ならびに「抑制(体重)動機」との相関は、それぞれ 0.02, -0.06 と低く、両者はそれぞれ独立していた。

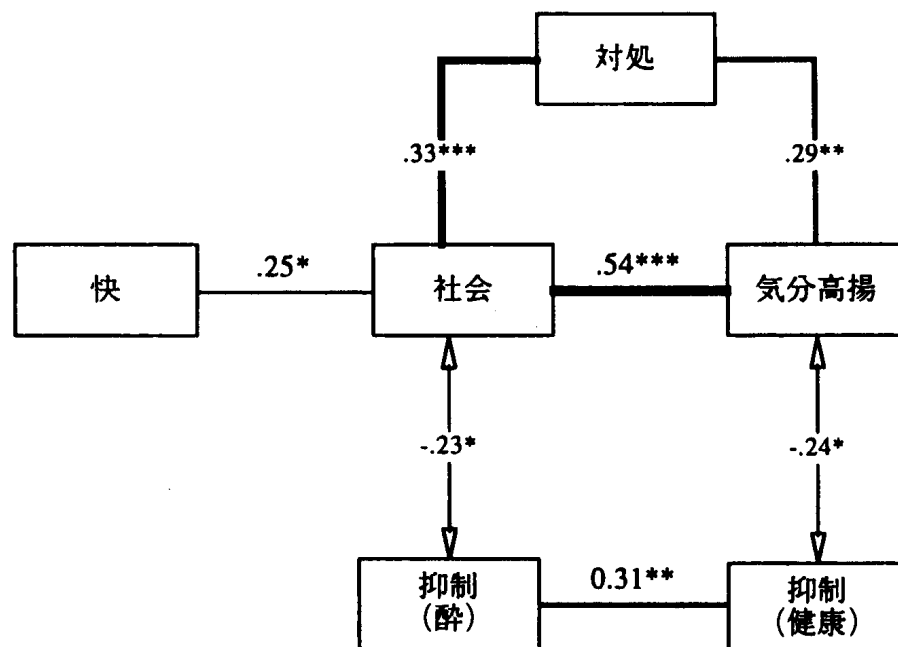


Fig. 1 尺度間の関連性 (尺度得点間の相関係数 r ならびにその有意性:  $^* < .05$ ,  $^{**} < .01$ ,  $^{***} < .001$ を示した)。

各尺度得点と年齢との相関をみたところ、「快動機」(第1尺度； $r=0.20$ ,  $p=.05$ ), 「対処性動機」(第2尺度； $r=0.22$ ,  $p<.05$ ), 「抑制(酔)動機」(第3尺度； $r=0.24$ ,  $p<.05$ )において、有意な正の相関がみられた。また日常の飲酒頻度との相関を見たところ、「快動機」(第1尺度； $r=0.25$ ,  $p<.05$ ), 「対処性動機」(第2尺度； $r=0.28$ ,  $p<.01$ ) および「社会性動機」(第4尺度； $r=0.25$ ,  $p<.05$ )において、有意な正の相関がみられた。

#### 4. 研究2：大学生を対象とした飲酒動機の測定

##### 4-1. 目的

研究1では、66項目版飲酒動機測定尺度が、6つの飲酒動機をほぼ独立に測定しうるものであること、またそれらは、仮定された9つの動機によって解釈できるものであることが示された。しかしながら、研究1の被験者は、日常の飲酒量が比較的多い男性のみであった。そこで、飲酒行動が徐々に習慣化しつつあると想定される青年期の男女を対象に、研究1で検討された6つの尺度によってどの程度彼ら(彼女ら)の飲酒動機を説明できるかについて検討していく。

##### 4-2. 方法

被験者 東京都内の大学生を対象とした講演会(参加人数約200名)において、調査への協力を依頼した。半数以上のものが回答し、誤記・回答もれ等を除いた126名を処理の対象とした。また、「あなたは普段、アルコール飲料をどの位の頻度でお飲みになりますか？(○はひとつ)」(6件法)という質問項目に「6. 全く飲まない」と回答した被験者が、男女それぞれ3名と4名いたために、さらに、これら7名も除外した。その結果、男子53名(平均年齢21.1歳)、女子66名(平均年齢20.0歳、ただし一名不記載)の計119名が最終的な処理の対象となった。未婚/既婚を直接問うた項目はなかったが、同居家族に関する質問への回答から、既婚者は含まれていないと判断された。

質問紙 研究3で用いた質問紙と同様のものを用いた。

結果および考察 Table 4に6つの尺度の男女別平均項目得点をしめした。「快動機」(第1尺度)については、女子が有意に高い得点であり、また「抑制(酔)動機」(第3尺度)および「抑制(体重)」(第5尺度)においても女子が有意に高い得点となった。研究1の被験者と比較すると、「快動機」(第1尺度)、「対処性動機」(第2尺度)、「抑制(酔)動機」(第3尺度)、「抑制(体重)動機」(第5尺度)の4尺度については、研究1の被験者の方が有意に高い値を示したが、「社会性動機」(第4尺度)および「気分高揚性動機」(第6尺度)においては、研究2の被験者の方が有意に高い値を示した。

Table 4 男女別の各尺度平均項目得点ならびに研究1で得られた結果との比較

尺 度	研 究 2				研 究 1				研究1と2の差異		
	平均尺度得点			性差		平均尺度得点					
	全体	男子	女子	t	p	全体	20歳代	30歳代	40歳代	t	p
1 快	1.64	1.55	1.72	1.9	<.10	2.17	2.30	2.12	2.08	-7.65	<.001
2 対 処	1.69	1.68	1.69	0.1	n.s.	2.13	2.28	2.17	1.93	-5.48	<.001
3 抑制(酔)	1.88	1.74	1.98	2.9	<.01	2.24	2.36	2.30	2.07	-5.23	<.001
4 社 会	2.19	2.21	2.18	-0.5	n.s.	1.49	1.57	1.47	1.44	11.79	<.001
5 抑 制 (健康)	1.80	1.66	1.92	3.2	<.01	2.47	2.38	2.57	2.46	-10.92	<.001
6 気分高揚	2.37	2.39	2.36	-0.3	n.s.	1.40	1.37	1.50	1.35	14.36	<.001

これらの差異は、社会人(男性)と学生との飲酒行動の差異を示していると解釈できる。研究1の被験者は年配の男性(平均年齢は34.1歳)であり、そのほとんどは勤労者(無職が数名含まれていた)であったことに対し、研究2の被験者は、20歳あるいは21歳の学生であった。学生は、社会的親近感を高める目的ならびに高揚した気分を得る目的で飲酒する傾向がつよく、それに対し男子勤労者は、飲酒そのものを楽しみ、また食事をよりおいしくする為に飲酒し、さらにストレス反応を緩和する目的で飲酒する。その結果、飲酒量、飲酒機会も多くなり、飲酒の抑制傾向もつよくな

る，と考えられる。

Fig. 2 は，Fig. 1 同様に 5 %以上の有意性が見られた尺度間の関係を男

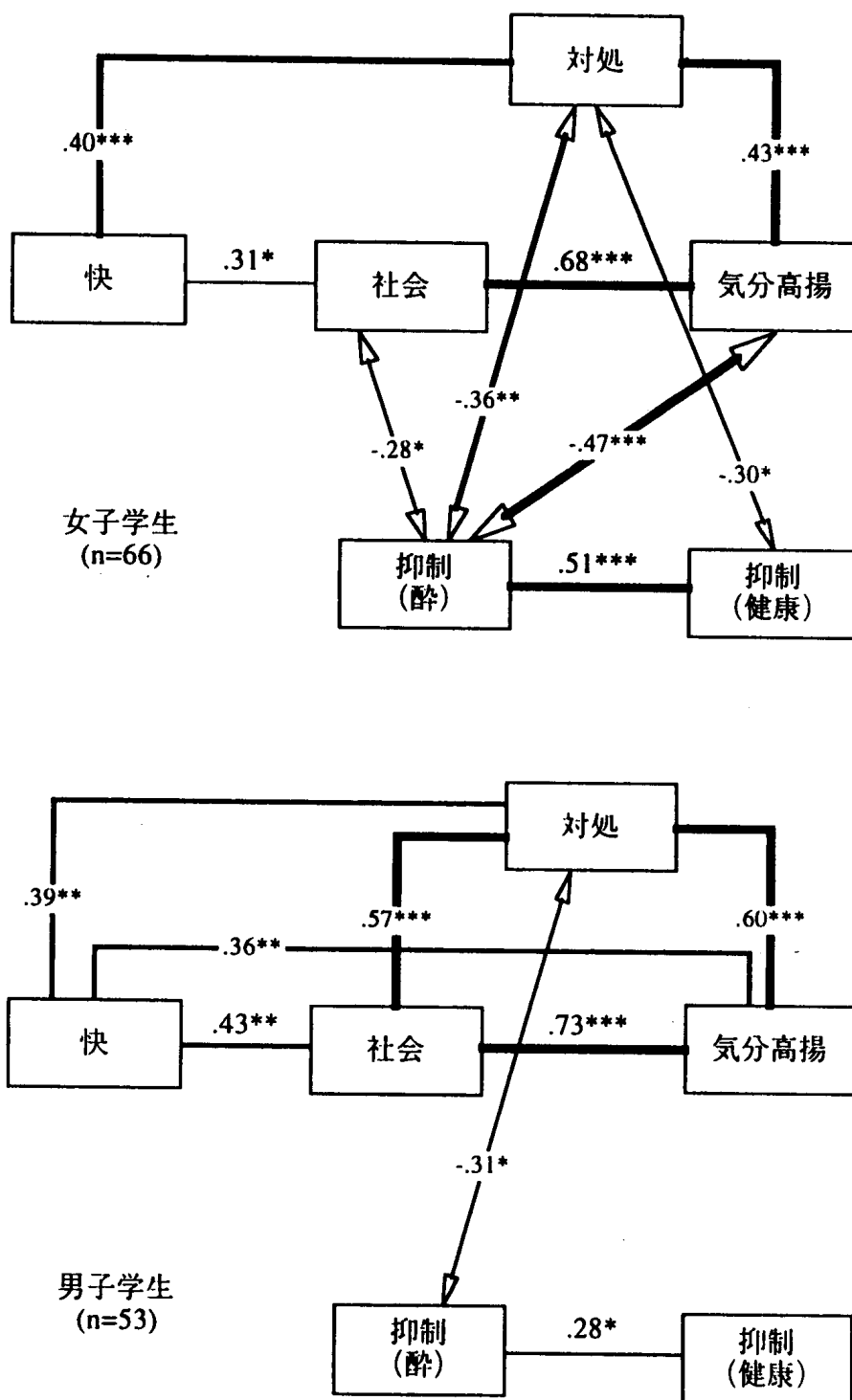


Fig. 2 男女別尺度間の関連性 (尺度得点間の相関係数 r ならびにその有意性: \*<.05, \*\*<.01, \*\*\*<.001 を示した)

女別に図示したものである。男女ともに Fig. 1 と比較して、飲酒を促進する4つの動機（「快」「対処」「社会」「気分高揚」）間の相関が強い。これは、飲酒歴の低い学生の飲酒動機がいまだ未分化の状態にあることを示唆する。特に男子においてこの傾向は強い。男女間における顕著な差異は、「抑制（酔）動機」が、女子においては3つの尺度と有意な負の相関を得ているのに対して、男子においては、「対処動機」のみが有意な負の相関を得ている点である。これは、女子学生にとっては、飲酒を促進する動機と飲酒を抑制する動機が、男子以上により葛藤状態にあることを示唆する。

## 5. 総 合 論 議

飲酒は、アルコール依存症等の直接的な要因となるだけでなく、1.自動車事故などの、あらゆる種類の事故の可能性をたかめ、2.出血性潰瘍などの疾患を悪化させ、3.病気が進行したり、頭部外傷などの怪我をしても、人に発見される可能性を低め、4.自殺および他殺により死亡する可能性を高め、5.急性アルコール中毒として死亡する可能性を高め（特に、他の薬物と併用される場合）、6.栄養失調や肝硬変などを進行させる等、種々の問題をもたらせる (Logue, 1991)。飲酒は、心身の健康を阻害する大きな要因であるといえる。実際に、アメリカ合衆国においては、その医療費の約15%はアルコール中毒およびアルコールに起因する疾病の治療につかわれ (Holden, 1987)、医療、事故、犯罪、福祉等に要する全体のコストは年間1兆ドルを超えると見積もられている (Barnes, 1988)。

飲酒がこのように健康（生存）を害する可能性の強いものでありながら、飲酒習慣は一般に広く流布している。例えば、国民栄養調査での質問項目の一つである「飲酒習慣」に対して、成人男子の半数以上は「飲酒習慣あり」あるいは「かつて飲んでいた」の項目を選択している（厚生省保健医療局健康増進栄養課，1998）。

健康阻害を最小限にとどめる飲酒について考えていくことは、現代人に

とって重要な課題の一つである。そして、その課題を解決していくためには、人はなぜ酒を飲むのかというより基本的な問題を解明していく必要がある。本研究は、このような観点から、飲酒を、飲酒動機という観点から検討することを目的として行った。

従来、飲酒動機として強調されてきたものは、アルコールのもつ緊張緩和効果であった。しかし、本研究結果は、飲酒が、緊張緩和すなわちストレスへの対処としてのみ動機づけられるものではないことを指摘した。また、Cooper *et al.* (1992) が示した社会性動機、対処性動機、気分高揚性動機という3つの動機だけでなく、酒そのものの味・匂いに対する感性的快、酒にかかわる新たな知識を得ることに喜びをもとめる認知的快、酒を食事を構成する重要な要素とみなし、食事からより多くの快をうる目的で飲酒するという食事性快によっても、飲酒は動機づけられていることが示された。さらに飲酒抑制の動機として、アルコール摂取に直接起因する生理反応すなわち酩酊の回避を目的とする動機と、飲酒による過剰なカロリー摂取、体重増加の回避を目的とする動機が区別されうるものであることが示された。これらの結果は、少なくとも、飲酒が緊張緩和によってのみ生起する行動ではないこと、複数の動機が複合的に作用し生起する行動であることを示している。

研究2では、飲酒習慣を獲得しはじめる段階にあると考えられる20歳代始めの男女大学生を対象とした。国民栄養調査において、飲酒の習慣ありと回答したものの比率は、男子20歳代から50歳代にかけては、26.3%、52.7%、57.1%、60.1%と増加している（厚生省保健医療局健康増進栄養課，1994）。この結果は過去一貫しており、30歳代から50歳代の飲酒者比率が50～60%であるのに対して、20歳代は20%台である。すなわち、研究2の被験者は、飲酒習慣の獲得段階にあるといえよう。大学生（研究2）と男子勤労者（研究1）の各尺度得点を比較すると（Table4）、「快」「対処」「抑制（酔）」「抑制（健康）」の4尺度において男子勤労者の得点が高く、「社会」「気分高揚」の2尺度において大学生の得点が高かった。アルコール依存症

の入院患者と飲酒習慣をもつ青年の飲酒行動を調査した Engstrom (1984) は、アルコール依存症患者の飲酒においては鬱が先行し、飲酒後には身体変化感、緊張緩和の見られることが多いのに対して、青年の場合は、社会圧、真似 (imitation) が先行し、飲酒後には、気分変化、仲間からの受け入れ (peer acceptance) の見られることが多いことを示した。すなわち、アルコール依存症者は、内的要因により飲酒が動機づけられまたその強化因も内的なものであるのに対して、青年の飲酒は、外的要因による部分がつよく、強化も、仲間からの受け入れといった外的な、社会性強化が含まれる。本研究においても、Engstrom の結果と同様に、青年期以降、飲酒が社会性動機による外的な統制から、徐々に、対処動機、快動機といった内的な統制へと変化していくことを示唆するものである。

女子の結果は、研究2の大学生を対象としたものしか得られていない。また尺度自体も男子勤労者 (研究1) を対象に作成されたものである。それ故に、本研究の範囲で、女子の飲酒動機を正當に評価していくことは困難である。国民栄養調査によれば、女子の飲酒習慣者は男子と比べ極端に低く (1988年より1992年のすべての年度で、女子全体に対する比率で6%台)、女子にとっての飲酒は、男子ほどに大きな健康障害要因になっていないといえる。しかしながら、女子は男子以上に、習慣的飲酒からアルコール依存症に推移しやすいと指摘されていること、勤労女子は主婦とくらべはるかに飲酒機会が多いであろうこと、また近年、勤労女子の比率が高まっていること等を考慮すると、女子に限定的な飲酒動機の研究は今後、必要とされる。ここでは、以上のことをふまえた上で、研究2で得られた女子学生の結果について論じていきたい。

Table 4 の、男女別大学生ならびに男子勤労者の尺度得点を比較すると、性差よりも大学生か勤労者かの違いの方が大きいことがわかる。また「抑制 (酔)」「抑制 (健康)」の2尺度における大学生の性差は有意であるが、他の尺度得点については有意差はみられていない。Fig. 1 では、男女別の尺度間の関連を示した。大学生女子においてもっとも特徴的なことは、「抑



制（酔）」尺度が「対処」「社会」「気分高揚」の3尺度と負の相関関係にあるのに対して、大学生男子は「対処」尺度とのみ負の相関関係が見られた点である。このような飲酒抑制の自制的傾向が、その後の人生において、勤労機会（飲酒機会）の相対的な少なさ以外にも、女子が習慣的飲酒者となりにくくすることに貢献していると考えられる。またその一方で、飲酒抑制の動機が低減した場合、負の相関関係にある動機がより以上に賦活され、飲酒がより以上に促進されるということも予想される。つまり、食行動の抑制がはずれた時に過食が生じるという現象（脱抑制: e.g., Herman & Polivy, 1980）と類似したことがおこりうると予想される。これらの結果は、食行動の場合と同様に（今田, 1994, 1996）、抑制的傾向が、女子の飲酒行動を特徴づけるものであることを示唆している。

飲酒習慣の獲得段階において社会要因が大きな役割を担うこと、飲酒機会また飲酒を強化するものも社会性の刺激であることを先に述べた。このことは、社会的飲酒の場面が変化することにより、飲酒習慣の獲得様式も変化することを予想させる。例えば、「一気飲み」が優勢であった頃と、「一気飲み」に厳しく対する現在では飲酒習慣の獲得様式にも変化があるであろう。

本研究により、飲酒が複数の動機によって統制される行動であることが示された。また、世代、性により、それらの動機の強度および動機間の関連性の異なることが示された。今後は、いずれの動機が健康阻害と関連がつよいか、どのような動機による飲酒が過度に慢性的な飲酒ひいてはアルコール依存症をみちびきやすいかといった観点からの研究が必要とされよう。

## 謝 辞

研究の遂行において貴重なご意見を賜った藤野成爾氏（キリンビール株式会社）、勝又孝文氏（キリン・シーグラム株式会社）に謝意を表します。

文 献

- Barnes, D. M. 1988 Drugs: Running the numbers. *Science*, 240, 1729-1731.
- Cooper, M. L., Russell, M., Skinner, J. B., & Windle, M. 1992 Development and validation of a three-dimensional measure of drinking motives. *Psychological Assessment*, 4, 123-132.
- Engstrom, D. 1984 A psychological perspective of prevention in alcoholism. In Matarazzo et al. (Eds.), *Behavioral health: A Handbook of health enhancement and disease prevention*. New York: John Wiley & Sons, pp. 1047-1060.
- ギャッチェル R・バウム A・克蘭ツ D.S. 本明 寛・間宮 武 (監訳) 1992 健康心理学入門 金子書房 pp. 352-384
- (Gatchel, R., Baum, A., and Krantz, D. S. 1989 *An introduction to health psychology, 2nd*. Newbery Award Records, Inc)
- Herman, C. P., & Polivy, J. 1980 Restrained eating. In A. J. Stunkard (Ed.), *Obesity*, Philadelphia: Saunders Company.
- Holden, C. 1987 Is alcoholism treatment effective? *Science*, 236, 20-22.
- 今田純雄 1994 日本語版 DEBQ 質問紙の標準化：食行動に関する心理学的研究 (3), 広島修大論集, 34, 281-291.
- 今田純雄, 1996 青年期の食行動 中島義明・今田純雄 (共編) たべる：食行動の心理学 人間行動学講座第2巻 培風館 pp. 10-22.
- 厚生省 (編) 1997 厚生白書 (平成9年版)：「健康」と「生活の質」の向上をめざして 厚生問題研究会
- 厚生省保健医療局健康増進栄養課 (監修) 1998 平成10年版国民栄養の現状 (平成6年国民栄養調査成績) 第一出版
- 厚生省保健医療局健康増進栄養課 (監修) 1994 平成6年版国民栄養の現状 (平成4年国民栄養調査成績) 第一出版
- Logue, A. W. 1991 *The psychology of eating and drinking: Introduction, 2nd*. New York: W. H. Freeman and Company. pp. 223-256.
- Polivy, J., Schueneman, A. L., & Carlson, K. 1976 Alcohol and tension reduction: Cognitive and physiological effects. *Journal of Abnormal Psychology*, 85, 595-600.
- 山田耕一 1989 アルコール依存 上里・飯田・内山・小林・筒井 (監修) メンタルヘルスハンドブック 同朋舎出版 pp. 407-418.